

教会暦と聖書の流れ

先週の箇所(マルコ 9・30-37)でイエスは 2 回目の受難予告をし、ご自分の十字架の道に弟子たちを招きました。先週の箇所では「仕える者になりなさい」「子どもの一人を受け入れる」ということが言われていましたが、それに続くきょうの箇所でも、イエスに従う弟子たちの生き方が示されると考えたらいいでしょう。つまり、ここには、弟子たちの生き方についての教えだけでなく、イエスご自身の十字架の道がどのようなものであるかということも示されていると言えそうです。

福音のヒント

(1) 「ヨハネ」はもちろん、ヤコブの兄弟である弟子のヨハネです。「先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちに従わないので、やめさせようと思いました」(38節)。イエスの名を使って悪霊を追い出す、しかし、自分たちとは歩みを共にしない、これはイエスの地上での活動の時代よりも、後の教会の時代の中にありそうな問題です。イエスは弟子たちの狭いグループ意識を批判します。「わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方なのである」という言葉はイエスの非常に広い、開かれた心を示しています。これは、イエスが十字架に向かう中で、敵意や憎しみを受け止め、すべての人を愛し続けた姿とつながります。ルカ9・50にも同様の言葉があります。



一方、マタイ12・30とルカ11・23には、まるで正反対のような、「わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしと一緒に集めない者は散らしている」(マタイ)という言葉があります。これらの箇所は「悪霊」につくか「神の霊」につくか、の二者択一を迫る文脈なので、厳しい言葉になっているようです。

(2) マルコ9・41「キリストの弟子だという理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いを受ける」という言葉も、狭いグループ意識に凝り固まらないイエスの心を示しています。

これと似た言葉をマタイは違う文脈の中で伝えています。「わたしの弟子だという理由で、この小さな者の一人に、冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける」(マタイ10・42)。マタイのほうは、弟子たちを派遣するにあたって、弟子たちが迫害を受けることを予告する、という文脈の中でのことです。マタイの「小さな者」は迫害されているキリスト信者のことだと言えるでしょう。マルコの箇所の「あなたがた」は、より一般的にイエスの弟子たちのことを言おうとしているようですが、やはりそこには迫害されている「小さな者」であるキリスト信者のイメージがあるかもしれません。なぜなら続

く42節にはやはり「小さな者」のことが語られているからです。41節と42節を苦しむ人々への態度を示す言葉として、内容的につながるものとして読むこともできるのでしょう。

(3) きょうの箇所全体を一つの教えと考えることは難しいようです。37節の「子供」、41節「キリストの弟子」と42節「小さな者」がイメージとしてつながり、42節の「つまずかせる」と43、45、47節の「つまずかせる」が言葉の上でつながっていますが、内容的には別なことを述べています。さらに、きょうの箇所の後、50節までも「地獄」「火」「塩」という言葉でつながっているだけで、内容的にはそれぞれ別な教えだと考えられます。

どうしてこのようなことがあるのでしょうか？ イエスの言葉は最初から文字に書きとめられたのではなく、口伝えで語り継がれていきました。人々の記憶にたよっていたので、このように、言葉やイメージ、あるいは似ている文章構造によって短いイエスの言葉が結び合わされ、記憶しやすい形で伝えられていったのだと考えられます。もちろん、内容的にもまったく無関係な言葉とは考えられません。これらの言葉全体は、イエスの弟子にふさわしい生き方を指し示す言葉として大切に伝えられていったのでしょう。

(4) 「つまずかせる」は本来、「人の歩く道に罫を仕掛ける、道に障害物を置く」という意味です。「罪に誘う、神への道から引き離す」という意味に受け取ればよいでしょう。ただし、42節の「つまずかせない」は、もっと一般的に「小さな者を軽んじ、小さな者に悪いことをしないように」という警告の言葉だと受け取ったほうがよいかもしれません。イエスの目はいつも「小さな者」に注がれていました。同じように「小さな者」を大切にすることが弟子たちに求められるのです。

43節以降の「手があなたをつまずかせる」「片方の足が・・・」「片方の目が・・・」は非常に強い言い方です。実際に手や足や目が人に罪を犯させるものではありませんし、もしそうだとしたとしても手や足や目を取り去ることは考えられません。これは明らかに誇張された表現で、「自分のつまずき」つまり「自分を神から引き離し、罪に誘うもの」を一切捨て去るようという強い警告です。「地獄」と「命・神の国」の対比も警告を強めるためですし、同じような警告が3度繰り返されるのも、この警告の厳しさをより強めています。

なお、新共同訳聖書のこの箇所を見ると、44、46節は省かれていて、そこに短剣のような記号「†」が付けられています。これは新共同訳が元にしたギリシア語聖書(底本)で省かれている箇所の印です。写本によってはこの二箇所には「地獄では蛆(うじ)が尽きることも、火が消えることもない」という48節と同じ言葉があるのですが、現代の学者は本来のマルコ福音書になかったと考えています。写本が書き写されていく中で、3つの警告の形を統一するために付け加えられていったようです(なお、この言葉はイザヤ66・24の引用)。

とにかく、ここではわたしたちに向かって、罪から絶縁するという厳しさが求められていることとなります。ただし、それは、日常の小さな罪から離れるということよりも、神と人への愛からわたしたちを引き離す決定的な罪の誘惑(=つまずき)のことと考えてもよいのではないのでしょうか？ 43節以下が42節と内容的なつながりがあるとすれば、「小さな者を軽視し、小さな者の歩む道を邪魔する」という心のあり方こそが、もっとも重要な罪の問題だと言えるかもしれないからです。

わたしにとって「小さな者」とは、「わたしをつまずかせるもの」とは何でしょうか？